

二〇一六年度

二月三日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-16 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

おれ・目黒俊介は、中学一年生。むかし自転車の選手だった父親の影響を受け、山の上り坂に設置されたコースを走る自転車ロードレースⅡヒルクライムに夢中だ。去年のレース『榛名山ヒルクライム』(通称ハルヒル)でタッチの差で負けたライバルに、今大会『笠城山ヒルクライム』では絶対に勝ちたいと意気こんでいる。

レースは中盤をむかえ、ついにおれはライバルの自転車、あこがれのイタリアのメーカーの高級ロードバイク、白のピナレロをとらえたのだった。

ライバルの白いピナレロがすぐ手前に迫る。

ダラダラとしたまっすぐな森のなかの坂道が延々続く。見た目以上に傾斜がきついのと、風景が変わらないことが、気力を削ぐ。

「だけど、……おれは、気力なら、……だれにも負けないんだよ！」

ここがチャンスとダンシングで追いかけた。

ライバルをとらえる。簡単に、そいつの前に出た。

ついでに、おとなをふたり抜かす。ライバルがついてこれられないのを確認すると、シッティングへ切り替えた。息を整えながらもケイデンスは落とさない。

① どこまでも続くように見える直線。

この区間は、コース一番の難所という人も多い。実はこれから先の山登りのS字カーブよりも厳しい傾斜が、気力だけでなく脚力も徐々に蝕んでいく。

でも、それはみんな一緒だ。練習量もロードバイクの性能にも差がなければ、あとは気力、勝とうという精神力。

負けられない。オヤジも母さんも、自分のことは二の次で、息子がツール・ド・フランスに出ることにすべてをかけている。おれだって、いろんなものを犠牲にしてきたんだ。

そのとき、後ろから疾風を感じた。

② 「あ?」

思わず目を疑った。

風と共にかけ上がり、あつというまに目の前に出てきたのは、学ラン姿の高校生だった。

「なんだ、あいつ……。ママチャリ?」

さらに前を走っている紫のジャージのおじさんにならんだ。ロードバイクの細いタイヤの倍はありそうな、ママチャリの太いタイヤで、グンツとスピードが上がった。

おじさんが抜かれた黒い影を見て驚いた顔をした。

なんであんなに速いんだ。ふざけた格好しやがって。ママチャリなんかには負けてたまるか。

もう一度ダンシングで追いかける。風を切ってスパートし、紫ジャージと学ランを続けて抜かした。

うちのオヤジがチューンしたロードバイクが、ママチャリなんかには負けるはずはない。さつきはライバルを抜かした直後で油断していただけた。

そう思った途端、再び風を感じた。あつというまに抜き返される。

「くそ！」

なんでこんなヤツに……。

おとなの選手たちを次々に抜かす高校生。引き離されないように、必死にくらいつく。

軸が左右にぶれる特徴のある走りだった。ただ後ろをついていくときには、そんなに速いと感じないのに、だれかを抜かすモードになると、とびきり速く感じる。どうしてチューンをしているのか、一見ふつうのママチャリに見えるが、^③なにか速く走るしかけがあるにちがいない。

こいつの秘密を突きとめたくて、引き離されないように夢中で走った。

スタートから十四キロ地点を過ぎ、コースは左手に大きくカーブする。そこにある青と白の看板『カーブ1』。今までの長い長い上りは、山のすそ野にすぎない。ここからが本格的なつづら折りの山登りになる。

カーブごとに看板があり、数字が大きくなる。右に左に大きく曲がるそのたびに、少しづつゴールに近づいていくということが実感できる。だから、終盤体力的には厳しいけれど、どこまでも続くように見える直線よりは、ずっと気持ち良かった。

いくつかのカーブを登っていて気がついた。目の前のママチャリ、ライン取りがめちゃくちゃまい。ときどき禁止されている対向車線にも浸食しながら、すすいと選手を抜いていく。もしかしたら、このコースを熟知しているのかもしれない。

そう思ったら、勝手に身体が反応した。

高校生が走るライン上をびったりとくつついて走る。自転車の性能では勝っているのだ。同じラインで走れば、離されないかもしれない。いや、離されてたまるか。

『カーブ9』の左カーブで、高校生がちらりと後ろを振り返った。白い通学用のヘルメットをかぶった日焼けした面長の顔。目が合い、ニコリと笑った。後ろにおれがいるのがうれしいという顔をして……。

※ どういう意味だろう。わけがわからない。

ちぎれなくて悔しいという気持ちにならないのだろうか。それとも、まだ本気を出していないとでも言うたいのだろうか。

^④ムカついてケイデンスをこれでもかと上げた。もう一度抜き返してやる。もう二度と馬鹿にして笑わせないように。

ならばかけると、高校生と再び目が合った。確信した。ヤツは本当に楽しげに笑っていた。

その直後、グンッとママチャリが加速した。

「くそっ！」

自転車ひとつ分空いた間。

それ以上離されないように懸命にペダルを回した。^⑤ 差を詰めていく。

タイヤひとつ分の間を取ったまま、次のカーブに進入した。三人のおとなたちの集団を避けるために、強引にインを攻める。最短のライン取りでママチャリのあとに続いた。

速いペースだ。レースではありえない格好で走るママチャリの背中を、夢中で追いかけているだけで、確実にふだんより速く走っている実感があった。

いくつかのコーナーを過ぎ、第三給水所の駐車場の看板が見えた。『この先三十メートル』。

給水所の文字が目に入ると、急に喉の渴きをおぼえた。夢中で気がつかなかったが、朝よりもぐんと気温が上がついているらしい。

額の汗も乾ききっていた。

給水場に寄ろうかと悩んだが、ここでママチャリに引き離されるのは我慢ができなかった。どうして速いのか見極めたかった。そのうえで、抜かして引き離したい。

ボトルホルダーに差してあるボトルを手取る。母さんが大会のたびに作ってくれる特製ドリンク。スポーツドリンクにレモンとはちみつが加えてある。

ゴクリゴクリと喉を鳴らすと、指の先まで水分がゆきわたるような気がした。ボトルにはまだ半分残っている。このままラストまで休んでなんかいられない。

第三給水所は、ボランティアスタッフが大勢いた。登山道の駐車場になっているから、ほかの給水所よりも広く、食べ物なんかも配っていると聞いたことがある。

「見て！あの人、すごい。」

給水所のボランティアが叫んだ。

わあっという歓声があがる。だれもがとびきり速いママチャリに注目しているのがわかった。

「がんばって！」

ひととき大きな女の子の声が響いた。高校生のボランティアらしい。その声に後押しされるように、ママチャリは軽快に坂を駆け上っていく。

意地でも離されてたまるか。そのすぐ後ろをぴったりとくらいついた。

⑥ コースは残り三キロ。本格的なS字カーブが続く。

すぐ前を走る黒い背中から、ハアハアという荒い息づかいが聞こえる。ここからは意地だけだ。勝ちたいと強く思うほうの勝ちだ。

ときどき引き離されそうになりながらもなんとか後ろをついていった。高校生の抜群のライン取りを真似しながら、それでもチャンスをうかがっていた。

ゴール前の直線までもつれこめばスパートで勝てる。

今は我慢どころだ。

大きな右曲りのコーナーで、ゆっくり走る集団に追いついた。

高校生がちらりとカーブミラーをのぞいた。※インに行く気だ。

ときどき救急車両やスタッフ車、それから、既にゴールした選手が下ってくる場合があるから、反対車線は走行禁止だ。

このママチャリも一応ルールに従ってはいるが、前に遅い集団がいる場合には、カーブミラーを確認してから反対車線に飛びこんでいくこともある。そういうときの加速は圧倒的に速い。

遅れてたまるか。

予想通り反対車線に飛び出した高校生のあとに続いた。

かなり強引にインに突っこむ。白線に近いアスファルトの段差をママチャリは軽々と通っていく。

同じラインを攻めこんだそのとき、段差にタイヤを取られ、身体が横に流れた。反射的に足首をひねった。

※ クリートペダルがシューズから外れる。

ロードバイクが山際の草の上に転がった。目の前にあざやかなタンポポの黄色が飛びこんできた。

「……………」

⑦ 次に見えたのは、澄みわたった青空。なにが起こったのか、しばらく理解できなかった。

落車した……………」

そう気がついて、跳ね起きた。顔を上げると、高校生の姿はなかった。当然だ。

「だいじょうぶか？」

後方の選手が声をかけながら通り過ぎていく。

「くそっ！いいペースで走っていたのに……。」

あわててロードバイクを起こしてまたがった。片足でペダルを踏もうとするが、いつもと足の感覚がちがう。

⑧ 血の気がサーツと引いた。

「チェーンが……。」

転んだはずみでチェーンが外れていた。

「こんなときに……。」

ロードバイクを降りて、チェーンを直そうとする。あわてればあわてるほど、指先が思うように動いてくれない。

⑨ 次々に後ろからくる選手に抜かれていく。

焦燥感に苛まれ、額の汗をぬぐうのもどかしい。

「……！」

そのとき、目がひとりの選手に釘づけになった。白のピナレロ……。顔を歪ませて懸命にペダルをこぐそいつと目が合った。

ハルヒルで負けたライバルだった。

「……。」

抜かれた。また、負ける。

おれは呆然と立ち尽くした。

前を走っていたのに。今回こそはライバルに負けまいと思っていたのに。中学生でトップは無理でも、同学年の選手には勝ちたかった。

オヤジと母さんに合わせる顔がなかった。ゴール地点にいる両親は、今か今かと期待をかけた息子のくるのを待っているだろう。

ライバルのほうが先に姿を見せたら、どんなに落胆するか。

しかたない……。チェーンが外れたのがいけないんだ。マシンさえちゃんと動けば、今からだってライバルをぶち抜くことができるのに。

おれだって、あいつみたいに身体に合ったピナレロに乗ってさえいけば……。

うつむいた頬に汗が伝わって落ちた。

⑩ このままリタイアしよう。結果を残せないなら、無理してチェーンを直して走る必要はない。

「どうした？故障か……？」

ロードバイクとはちがう乾いたタイヤの音がした。

「……！」

顔を上げて、とっさに言葉が出なかった。

さっきまで夢中で追いかけていたママチャリ高校生だった。

「チェーンか？」

高校生がママチャリを路側に止め、ロードバイクをのぞきこむ。

「なににきたんだよ！」

おれは思わず叫んだ。第一こんな変なヤツと関わったから、痛い目にあつたんじゃないか。

「気づいたら追いかけてこなかったから、なにかあったのかと思つてさ。転んだのか？だいじょうぶか？」

「……………」

⑪ 言われて初めて痛みがついた。ヒジのところから血がにじんでいる。

「なに考えているんだよ。レース中だろ？」

⑫ 「だって、おもしろかったからさ。」

高校生はそう言つて、日に焼けた顔でにつこりと笑つた。

「……………」

「おまえ、中学生だろう？スゲーよ。おれが抜かしたのに、ちぎれなかったヤツなんて……………」

「……………」なに言つてんだよ。だって、それ、ママチャリだろう？おれのはロードバイクなのに……………」

「この道路は通学路なんだぜ。中学のときから毎日走っているんだよ。おまえらみたいなよそからきたヤツラには負けないよ。しかも、中坊にさ。」

「……………」

「とにかく、おれ、おまえに追いかけてスゲーわくわくしたんだ。さつさとこれ、直して続きやろうぜ。」

高校生はそう言つて、しゃがみこんでチェーンにむかう。

「……………」

中学生が通学のときにかぶるような白いヘルメットを見下ろしながら、^⑬喉の奥おくにしょっぱいものがこみ上げってくる。

次から次に、後続の選手が追い抜いていく。

「できた！はまったぞ！」

高校生が立ち上がつて、額の汗あせをぬぐう。

「あれ……………」

ロードバイクを起こして少し前進させた高校生の顔がくもつた。

「あちゃ〜。パンクもか……………」

「もういいです。」

再びロードバイクを横にして、パンクした後輪をのぞきこむ高校生におれは言った。
たかがママチャリと馬鹿ばかにしていた。

けれど、ママチャリの太いタイヤなら楽に越こえられたアスファルトの段差が、細いロードバイクのタイヤでは越えられなかった。

今回のヒルクライムのレース用に軽さを重視したタイヤに変えた。新品のときは丸いタイヤが、調整を重ねていくうちに親指くらいの幅はばで平らにすり減つていた。今回のレースには、ぎりぎり耐たえられると判断していたのに。ふつうに走つてさえいれば。

こうなつたのは、愛車を理解していなかった自分のうぬぼれが原因だ。

イタリア製の何十万のロードバイクじゃなくても、勝つ方法はあつた。負けたのはおれ自身のせいだった。機材の性能のせいにしていた自分が情けなかつた。

「先にいってください。そんなに速いのに、もつたいいいです。」

「なんだよ。おれはおまえと続きが走りたいんだよ。」

「だって、せっかくのレースが……。」

「レースなんて関係ないの！おまえと一緒に、全力で抜くか抜かれるかっていうのが楽しいんだから……。」

「楽しい？」

おれは思わず聞き返した。

「おまえだって、楽しかっただろう？」

高校生は振りむいた。

自転車に乗っていて、楽しいなんて感情を持ったことがなかった。レースはいつだって真剣勝負で、勝つためのものだ。勝たなければ意味がないし、練習だってそのためにしていた。

風が吹いて足元のタンポポの綿毛が飛んだ。

それでも、高校生の後ろ姿を必死で追っていたとき、楽しいと思わなくなかった。どうして速く走れるのか、知りたくてたまらなかつた。

「うん。おれも、アニキともっと一緒に走りたい。」

「アニキ？」

高校生がすつときような声を出した。

「へへへ。よし、直すぞ！換えのチューブ持つてるんだらう？」

「うん。」

高校生は照れくさそうに笑って、ロードバイクへむかう。

もつと速く走れるようになりたい。オヤジのためではなく、^⑭ のために。そして、この人の後ろを全力で追いかけてい。

強い日差しに光る通学用の白いヘルメットを見下ろしながら、心からそう思った。

(加部鈴子「風のヒルクライム」より)

※(注) ダンシング——立ってペダルをこぐこと。立ちこぎ。

シッティング——座ったままペダルをこぐこと。

ケイデンス——ペダルを回す回数。

ツール・ド・フランス——毎年7月にフランスで行われる、自転車のプロの世界大会。

スパート——全速力を出すこと。

チューン——チューニング。自転車に手を加えて、レースのために調整すること。

つづら折——ジグザク状に急カーブが続く坂道。

ちぎれなくて——ぶつちぎれなくて。相手を大きく引き離せなくて。

イン——道の内側。

クリートペダル——ペダルとシューズをペダルで固定することで一体化させる仕組みのペダル。踏み

込む力と引き上げる力の両方を効率よく発揮できる。足をひねって外さないと
けない。

苛まれ——悩み苦しめられること。

リタイア——レースをとちゅうでやめて、退場すること。

問一 ― 線①「この区間は、コース一番の難所という人も多い。」とありますが、「この区間」について具体的に説明している連続する二文を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問二 ― 線②「思わず目を疑った。」とありますが、「おれ」は自分をぬいた人物の何を見て「目を疑った」のですか。文中からそれぞれ五字以内で二つぬき出して答えなさい。

問三 ― 線③「なにか速く走るしかけがあるにちがいない。」とありますが、「おれ」が初めに気づいた「早く走るしかけ」とはどういうことですか。解答らんのこと」につながるように文中から十五字でぬき出して答えなさい。

問四 ― 線④「ムカついてケイダンスをこれでもかと上げた。」とありますが、「おれ」はなぜ「ムカついたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 高校生が自分を挑発するよう^{ちようはつ}に後ろを振り返って笑いかけてくることに、集中できなくてじゃまだと感じたから。

イ 高校生がゴール前の一番重要なカーブ区間をふざけて走っていることで、自分にとって大切なレースをけがされたように感じたから。

ウ 必死で追いかける自分の存在を高校生がなげうれしがっているのかわからず、馬鹿にされたように感じたから。

エ 高校生が中学生の自分に追いつかれてもくやしがついていない様子から、レースに本気で取り組んでいないと感じたから。

問五 ― 線⑤「差を詰めていく。」とありますが、にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ジリジリと イ ゲンゲンと ウ のろのろと エ ばたばたと

問六 ― 線⑥「コースは残り三キロ。」とありますが、「おれ」はこの「残り三キロ」を走るのにどのような計画を立てていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 高校生の後ろをはなされずについて行って、ゴール直前の直線でぬくという計画。

イ カーブを曲がる時には常に内側の反対車線を走って、最短距離でゴールを目指すという計画。

ウ 残りはたった三キロなのだから、もうよそ見はしないで自分の走りに集中するという計画。

エ 勝ちたいという強い気持ちで高校生をぬいてから、ゆっくりとゴールを目指すという計画。

問七 — 線⑦「落車した……。」とありますが、「おれ」が落車した時の様子の説明について最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「タンポポの黄色」や「澄みわたった青空」を色彩豊かに描くことで、反対に「おれ」の「落車」という悲劇的な場面を印象深く説明している。

イ 「おれ」の視界に入ってきたものを順番にあげることによって、「おれ」がロードバイクから落車したはずみでコースからはずれ、体が転がってしまったことを説明している。

ウ 「なにが起きたのか、しばらく理解できなかった」とし、とっさに「落車」を受け入れられない「おれ」の幼さが、失敗の原因であることを説明している。

エ 「落車した」理由をまったく書かないことによって、「落車」が予測不可能で避けられない不運な出来事だったことを説明している。

問八 — 線⑧「血の気がサーッと引いた。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「血の気が引く」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 顔が青ざめること イ 貧血をおこすこと ウ 頭に血が上ること エ 興奮すること

2 なぜ「血の気がサーッと引いた」のですか。その理由を説明した一文を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問九 — 線⑨「焦燥感」とは「いらだちあせる気持ち」のことですが、この気持ちが表れている「おれ」の様子を説明した一文を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十 — 線⑩「このままリタイアしよう。」とありますが、それまでチェーンを直そうとしていた「おれ」の気持ちだが、「リタイアしよう」と変わったのは、どのようなことがきっかけですか。解答らんの「こと」につながるように文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問十一 — 線⑪「なに考えているんだよ。」とありますが、「おれ」は高校生が何をしたことに対してこのように言ったのですか。解答らんの「こと」につながるように十五字以内で説明しなさい。

問十一——線⑫「だって、おもしろかったからさ。」とありますが、「高校生」は何を「おもしろかった」と言っているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア レース用に調整されたロードバイクと競争すること。
- イ 自分が中学生の時から毎日通う通学路がレースコースになっていること。
- ウ 周りは大人ばかりの中、自分と同じくらいの中学生と一緒に走ること。
- エ ぬかした相手に追いかけられながら全力で勝負すること。

問十二——線⑬「喉のどの奥おくにしよっぱいものがこみ上げてくる。」とありますが、この時の「おれ」は「高校生」のどのようなところに心を動かされたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 落車して落ちこむ「おれ」のことを、必死でなくさめようとしてくれるところ。
- イ 「おれ」の実力を認めて、前向きに「おれ」との競走を楽しんでいるところ。
- ウ 自分のレースを投げ出してまで「おれ」を助けに来てくれたところ。
- エ 落車という不利な状況じょうきょうに置かれても、最後まであきらめないところ。

問十三——線⑭「のために」とありますが、にあてはまる言葉を考えて漢字四字で答えなさい。

問十四 本文中の「おれ」について説明したものとしてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「おれ」は、自分がレースで勝てないのは自転車の性能に原因があると考え、高級なロードバイクに乗っているライバルをうらやましく思っていた。
- イ 「おれ」の自転車レースを応援おうえんするために、自分たちのことは犠牲ぎせいにして新しい自転車を用意してくれた両親に対して、負けることは申し訳ないと考えていた。
- ウ レースに出るのは勝つためだと考えていた「おれ」は、負けるくらいならば途中とちゅうでリタイアする方が自分も両親も傷つかないはずだと考え、勝負から逃げようとした。
- エ 高校生との出会いを通して楽しんで走ることを知った「おれ」は、そのことを教えてくれた高校生に敬意と親しみをこめて「アニキ」と呼んだ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① 「サルまね」ということばがあります。これは、日本語圏だけで使われている表現ではないようです。欧米圏でも類似の表現があります。サルまねすることを英語では ape というのですが、ape には類人猿という意味もあるのです。このように、文化、言語を問わず、一般に模倣には単純で主体性や独創性に欠けるといったネガティブな印象がつきまといまいます。

A、ここ二〇年の比較認知科学の成果が示してきたことは、実際にはサルは模倣しない、という事実でした。「サルまね」という言葉の使い方は、じつは間違っていたのです。模倣を苦手とするのはサルだけではありません。チンパンジーにとつてすら、身体模倣はとても難しいことがわかってきました。

チンパンジーがどれほど模倣を苦手とするのか、もう少し具体的に説明しましょう。私がまだ大学院生だった頃、恩師である京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生と行った研究です。この研究は、今でも、私がヒトらしい心を考える上での柱となっています。私たちは、大人のチンパンジーの模倣がどのような点でヒトより制限されているのか調べてみました。③ ヒトがモデルとなり、物の機能に関係しない無意味な行為を対面してチンパンジーに見せました。この実験で無意味な行為を扱ったことには、理由があります。チンパンジーにとつてなじみのある行為、B 容器のふたを開ける、といった行為をモデルが見せてそれを模倣したとしても、それがモデルの行為を観察した結果としての反応なのか、モデルの行為を見ることに関係なく自分で自発的に行った反応なのかを区別できなくなるからです。意味のない行為を再現した時、はじめて真の模倣の証拠が得られたこととなります。

④ この実験では、チンパンジーにとつてどのような行為を模倣するのが難しいのかを明らかにするため、提示する行為に含まれる要素のうち、①操作する物の数や物が操作される方向(一つの物を・一つの物を自分の身体へ・一つの物を別の物へ)、②運動パターンのタイプ(チンパンジーにとつてなじみのあるパターン「たたく・押す・つつくなど」・なじみのないパターン「なでる・転がすなど」)を変数として、計四八種類の行為を提示しました。

その結果、チンパンジーは提示した行為を訓練なしに見ただけで再現することはほとんどありませんでした。C。さらに模倣の難易度にかかわる要因についてみると、「一つの物を」操作する行為は、「一つの物を別の物へ」、「一つの物を自分の身体へ」向ける行為よりも、再現が難しいことがわかりました。なじみのある運動パターンを含む行為は、なじみのない運動パターンを含む行為に比べて再現しやすいようでしたが、重要なこととして、たとえなじみのある運動パターンからなる行為であっても、チンパンジーが訓練なく模倣することはほとんどありませんでした。

どうやらチンパンジーは、他者の行為の捉え方がヒトとは異なっているようです。チンパンジーにとつては、モデルが操作する物についての情報(操作される方向)が再現するための手がかりとして有効に働きました。しかし、他者の身体の動きについての情報(運動パターン)は、再現するための手がかりとはなりにくいものでした。例をあげると、同じ「たたく」という運動パターンを含む行為の中でも、「箱を―たたく(一つの物を操作する)」行為は、「棒で―箱を―たたく(一つの物を別の物へ操作する)」行為に比べて、再現が難しいことがわかりました。チンパンジーが他者の行為を模倣する場合には、他者の身体の動きよりも、操作される物の動きに注目しているようです。チンパンジーは、物の属性や操作方向といった情報を手がかりに他個体の行為を模倣していますが、複雑な身体の動きの模倣はヒトに比べてかなり制限されているので

す。とくに、身体の動きに関する情報しか含まない（物を操作しない）行為、たとえば身ぶりなどは、チンパンジーにとって模倣するのがとりわけ困難であると予測できます。

どうやら身体模倣は、私たちヒトの祖先がチンパンジーの祖先と枝分かれした後、およそ七〇〇万年前から後のどこかの時点で獲得された能力だと考えられます。身体模倣は、ヒト特有の心のはたらきを探る上で鍵となる能力なのです。

⑥ ヒトが獲得してきた高度な模倣能力は、ヒトにとってどのような適応的意義があったのでしょうか。これまで、研究者はおもに次の二つの側面を強調してきました。

ひとつめは、道具の作り方、使い方など、遺伝的には伝わらない複雑な情報を伝達する手段としての側面です。私たちの身の回りには、パソコン、携帯電話など使いこなすには複雑な知識を必要とする道具がふれています。私たちはどのようにこれらの使い方を身につけるでしょうか。付属マニュアルを丹念に読み込み、独力で学習する方は、おそらくほとんどいないでしょう。多くの方は、誰かが使っているやり方を見よう見まねで再現し、学習するのではないのでしょうか。他者の行為を模倣することによる学習は、試行錯誤による個体学習よりも効率的に知識や技能を獲得することができます。さらに身体模倣は、そうした情報を正確に次世代へと伝えていくこと、情報を蓄積していくことを可能にします。⑦ 身体模倣は、ヒトの文化を築き上げた鍵であると考えられています。

ふたつめは、所属集団のメンバーとして生存するために、他者とのコミュニケーションを成功させる手段としての側面です。他者と円滑にコミュニケーションするには、他者が自分と同じように心をもつ存在だと理解すること、他者の行為の意味をすばやく読み取って対応していくことが重要です。他者の意図、他者が何を望んでいるのか、何を信じているのかを理解する能力は、「心の理論」と呼ばれています。このような心のはたらきが発達するための基盤となる役割を、身体模倣が果たすという見方があります。例えば先ほど述べたように、ヒトの赤ちゃんは他者の身体の動きを模倣することで、他者が自分と同じ身体的特徴をもつこと、他者と自分との身体の「D」を理解していきます。さらに、身体模倣は、自分自身が同じ行為で得た経験を、観察した他者の行為に照らし合わせることを可能にします。その結果、赤ちゃんは他者の行為を観察する際、自分の心的状態を他者の行為に投影させるようになります。レモンをかじって酸っぱい表情をしている人を見たとしましょう。思わず、私たちが口内に唾液があふれ、酸っぱい表情をしてしまします。しかし、まだレモンをかじった経験のない赤ちゃんでは、こうした反応はみられません。レモンをかじる、という自分の身体を使った経験が、他者の行為の理解に深く影響するのです。このほか、身体模倣は、目前にない対象について考える表象能力、ある対象を他のもので代表する象徴的思考（言語など）を獲得するための前提条件としても注目されてきました。

身体模倣は、ヒトの高度な知識や技能の習得と世代間伝播、他者の心的状態を理解する能力の基盤となるきわめて重要な能力であると言えます。サルまねは、ヒトの心の発達や文化に大きな役割を果たしている。この事実を、私たちは再認識する必要があります。

（明和政子「まねが育むヒトの心」より）

※（注）ネガティブ 否定的、消極的なさま。

比較認知科学 動物の知能や心を研究し、ヒトと比べてヒトの認知機能を明らかにする学問。

霊長類 人類とサルのなかま。

変数 いろいろな値をとって変わる数量のこと。

先ほど述べたように 出典の部分の前で述べていたことを指す。

問一 ——線①「サルまね」とはどのような意味の言葉ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア まねをしてもうまくいかずに失敗すること。
- イ 人のまねをして知識や技術を身に付けること。
- ウ おどけた様子で人のまねをすること。
- エ 考えも無くうわべだけまねをすること。

問二 文中の A、Bに入る言葉として適当なものをそれぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ア たとえば イ なぜなら ウ つまり エ しかし

問三 ——線②『「サルまね」という言葉の使い方は、じつは間違^{まちが}っていたのです。』とありますが、なぜ間違いだと言えるのですか。その理由が書かれた部分を解答らん「から」につながるように文中から十字以上十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問四 ——線③「ヒトがモデルとなり、物の機能に関係しない無意味な^{こうい}行為を対面してチンパンジーに見せました。」とありますが、なぜ「無意味な行為」を見せたのですか。次のア～エの中から最も適当なものの一つを選び、その記号を答えなさい。

- ア 身体能力が制限されていて上手に体を動かせないチンパンジーでもモデルの行為を^{もほう}模倣できるようにするため。
- イ チンパンジーがモデルの行動を模倣したのか、モデルの行動に関係なく行動したのかを区別するため。
- ウ 自分から進んで苦手な模倣をしようとしなないチンパンジーの興味を引き、実験がうまくいくようにするため。
- エ チンパンジーがモデルの行為の意味を理解しているのか、ただ模倣しているだけなのかを見分けるため。

問五 —— 線④「この実験」とありますが、この実験の結果明らかになったこととしてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア チンパンジーにとってなじみのある運動を含む行為はなじみのない運動を含む行為よりも再現しやすかった。

イ チンパンジーにとって「一つの物を別の物へ」向ける行為は他の行為とくらべてなじみのある行為であった。

ウ チンパンジーにとって「一つの物を」操作する行為が他の行為とくらべて最も模倣するのが難しくかった。

エ チンパンジーにとってなじみのある行為であったとしてもその行為を訓練なしに模倣することはなかった。

問六 文中の Cに入る文として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア チンパンジーの模倣は、サルまねに過ぎなかったのです

イ チンパンジーは、サルまねを身につける必要はなかったのです

ウ チンパンジーにとって、サルまねはやはり難しかったのです

エ チンパンジーのサルまねは、想像以上に高度なものだったのです

問七 —— 線⑤「たとえば身ぶりなどは、チンパンジーにとって模倣するのがとりわけ困難であると予測できます。」とありますが、このように予測できるのはなぜですか。解答らんの「チンパンジーは」という書き出しにつながるようにできるだけ文中の言葉を使って三十字以上三十五字以内で説明しなさい。

問八 —— 線⑥「ヒトが獲得してきた高度な模倣能力は、ヒトにとってどのような適応的意義があったのでしょうか。」とありますが、ヒトが獲得してきた模倣能力にはどのような適応的意義があったのですか。次のア～オの中から適当なものを二つ選び、その記号を答えなさい。

ア 高度な道具を発明するときのヒントや手がかりを見つける。

イ 道具の作り方など生まれつき身に付いていない高度な情報を伝える。

ウ 集団生活の中で必要とされる複雑な道具を簡単に使えるようにする。

エ 一緒に活動をする集団にいるメンバーの性格や特徴を理解する。

オ 集団の一員として、他者の気持ちや考えを理解してうまく交流する。

問九 — 線⑦「身体模倣は、ヒトの文化を築き上げた鍵であると考えられています。」とありますが、このように考えられているのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 身体模倣は効率的に知識や技能を獲得し、さらに正確に次世代へと伝えて蓄積していくことを可能にするから。
- イ 身体模倣は人間に道具の作り方や使い方を実際に体験させることで、マニュアルを正しく理解することを可能にするから。
- ウ 身体模倣は人間の試行錯誤による個体学習を活発化し、さらに新しい知識や技能を身に付けることを可能とするから。
- エ 身体模倣は複雑な道具の使い方を独力で学習する手助けとなり、さらに情報をマニュアル化して次世代に残すことを可能にするから。

問十 文中の□ Dにあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 異質性
- イ 可能性
- ウ 等価性
- エ 独創性

問十一 — 線⑧「まだレモンをかじった経験のない赤ちゃんでは、こうした反応はみられません。」とありますが、これについて次の1・2の問いに答えなさい。

1 「こうした反応」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア レモンをかじっている人を見たときに、レモンをかじっている人の気持ちを理解したいと思いき、思わず酸っぱそうな表情をまねしてしまうこと。
- イ 他の人がレモンをかじって酸っぱそうな表情をしているのを見たときに、無意識に口の中に唾液があふれ、酸っぱい表情をしてしまうこと。
- ウ 酸っぱいものをかじったときに、他の人がレモンを食べたときと同じように酸っぱそうな表情をしてしまい、口の中に唾液があふれること。
- エ 他の人がおいしそうにレモンをかじっているのを見たときに、自分もレモンを食べてみたくなって口の中に唾液があふれてしまうこと。

2 「まだレモンをかじった経験のない赤ちゃん」に「こうした反応」がみられないのはなぜですか。その理由を説明した次の文の□ にあてはまる語句を文中から十五字以上二十字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

レモンの酸っぱさを感じたことがないので、レモンをかじっている人の様子を見ても

□ ことができないから。

問十一 この文章で筆者が言いたいこととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 模倣^{もほう}には文化や言語を問わず、単純で主体性や獨創性に欠けるといったネガティブな印象があるが、高度な模倣を行うためには主体性や獨創性が必要なことを理解しなければならぬ。

イ サルまねという言葉は単純な模倣を表す言葉として用いられているが、チンパンジーの実験を通してサルはまねをしないことがわかったので言葉の使い方を変えなくてはならない。

ウ 模倣には主体性や獨創性に欠けるといった印象があるが、模倣は言語などの象徴^{しょうちゆうてき}的思考を行うためにヒトが生み出した主体的、獨創的な能力であることを再認識しなくてはならない。

エ サルまねという言葉にはネガティブな印象がつきまよっているが、身体模倣はヒトの心の発達や文化に大きな役割を果たしている重要な能力であることを改めて考えなくてはならない。

三 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 部屋をセイケツにする。
- ② ゼンリヨウな人。
- ③ タイシユウの声に耳をかたむける。
- ④ 食べ物をチヨゾウしておく。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 用事を済ませる。
- ② 銀行にお金を預ける。
- ③ 幸いなことにけがはなかった。
- ④ バスを連ねて旅行に出かける。

問三 次の1・2の漢字の矢印が指し示す太線部は何画目に書きますか。それぞれ漢数字で答えなさい。

1 乗
2 雑

問四 次の1～4の漢字の読みの組み合わせとして適当なものを後のア～エの中から選び、それぞれその記号を答えなさい。

- 1 口紅
- 2 雨具
- 3 軍手
- 4 正座

ア 音読み＋音読み イ 音読み＋訓読み ウ 訓読み＋訓読み エ 訓読み＋音読み

問五 次の1～3の熟語の反対の意味を表す二字の熟語を、後の漢字を組み合わせさせてそれぞれ答えなさい。
同じ漢字は二度使えません。

- 1 延長
- 2 集中
- 3 強制

重 守 短 分 自 縮 立 散 客 発

